大手前大学論集　第12号（２０１１）85―107頁

『ダンマパダ』と教育㈣

古田榮作

要旨

日常語となっている「地獄」は、梵語niraka　奈落、niraya　泥梨の訳語として日本語になっているが、この語の概念はアッシリア・シュメール文化起源のものであり、インドに移入されたものである。「善因楽果」「悪因苦果」と説く仏教に取り入れられたのである。

『ダンマパダ』はその一章を「地獄の章」（Niraya-vagga）としている。釈尊の時代にどのように「地獄」が位置づけられ、どのように仏教の一つの重要な概念としてまでたかめられたのであろうか。六道の最下層に置かれる地獄が、悪因の苦果として描かれ、さらにはどう蹠こうとも休むことなく続く苦しみを受けるavīci　阿鼻地獄、無間地獄までもがリアルに描かれている。しかし悠久の転生によりそこからの他の六道への移行も否定はしない。

『ダンマパダ』の「地獄の章」を中心として、地獄がどのように描かれ、どのような者が「地獄」に墜ちるのだろうかを考察した。

キーワード：ダンマパダ　地獄　不実語者　悪作　阿鼻地獄

本稿では、ダンマパダの中で「地獄」がどのように捉えられているかを、考察する。ダンマパダはその22章を“Nirayа”（Hell　地獄）に宛てている。パーリ語のNirayaは水野弘元の『パーリ語辞典』では、地獄、泥犂の語義が示され、サンスクリット語のNārakaであるとする。[1]荻原らの『梵和大辞典』では、〔人生からの離脱〕、地獄［また人格化されて恐怖および死の子ともされる］として漢訳として地獄、無可楽、無有卑下を宛てるとともにその音訳語として泥犂、泥黎耶、泥黎迦を宛て、[2]Ⓢ Narakaには地獄の住者：地獄、地下界、冥界：との訳語を与えるとともに地獄有情、地獄衆生：地獄、悪趣：を宛てその音訳語が那落迦、那落迦摂であるとしている。[3]Prin Vaman Schivaram Apte の『梵英辞典』は、नरक（Naraka）は１）Hell, infernal region（corresponding to the realm of Pluto; there are said to be 21 different parts of these region where different kinds of tortures are inflicted upon sinners 2）A liquor-vessel, of a demon, king of Prāgjyosa.［According to one account he carried off Aditi's earing and Kṛiṣna at the request of the gods killed him in a single combat and recovered the jewels. According to another account, Naraka assume the form of an elephant and carried off the daughter of Viśvakarman and outraged her. He also seized the daughters of Gandharvas, gods, men and the nymphs themselves, and collected more than 16000 damsels in his harem. These, it is related, were transferred by Kṛiṣna to his own harem after he had slain Naraka. The demon was born of earth, and hence called 'Bhauma'］[4]と示されている。さらに岩本裕氏は『地獄と極楽』の中で、

地獄の信仰なり思想なりがインドの原住民の宗教信仰の影響で成立したという証拠はまったく知られていない。

ところが、インダス文明の時代以来交流の行われていたチグリス＝ユーフラテス河流域には、古くから地獄の思想があったことが知られている。すなわち、この地域には世紀三千年のころから栄えたシュメール族の間には「戻ることのない国」クルの信仰があった。冥府クルは地下の陰鬱な国で、バビロニアおよびアッシリアのアラルルー、ヘブライ族のシェーオールとともに、セム民俗が古くからもっていた地獄思想の表象である。ギリシア人が信じた地獄ハァーデースは、このセム民俗の信仰の影響で成立したことが知られている。しかも、シュメール民俗の間には、世紀二千年ごろに、女神『イナンナの地獄遍歴』の神話があり、西アジアおよびギリシアの神話伝説にさまざまな影響を与えた。インドもその例外ではなかった。[5]

また、'encyclopedia Britannica'では、メソポタミア文明では紀元前三千年紀～一千年紀の間に、死と地獄を描く文学を生み出し、生の世

界と区別される死と脆さの世界を描き出し、地獄は帰ることの出来ない遠く離れた場所であり、地位や功徳の区別なく死人が住む所であり、典型的には、侵入と逃亡を防ぐ七つの門で遮られた封じ込められた搭載とゴミの溜まった家であると叙述されている。[6] ギルガメッシュ叙事詩では、死人が埃を飲み石を食べる暗い場所[7]として描かれているところで、『ダンマパダ』では、その一章が地獄（SPnaraka SPniraka）の章として置かれているばかりでなく、十章に亘って八大地獄、焦熱地獄、大叫喚地の地獄は焦灼熱地獄に含まれる）、阿鼻地獄（この地獄も焦熱地獄に含まれる）についても言及している。

日本語としても馴染みの深い奈落・那落・捺落・那落迦と音写されるSPnaraka（那落迦）PPniraka（泥犂）は、地獄・冥府を意味し、インドにはアッシリア・シュメールから輸入された概念で、「善因楽果」・「悪因苦果」を説く仏教に取り入れられたものである。『ダンマパダ』はその第22章を「地獄」[8]にあてているが、その第一節はブッダを陥れようとしたスンダリーの逸話に因むものとされている。その逸話の概要は次の通りである。

賞讃された人と僧の会衆が、五大河の合流により力強い流れとなるのと同じく収入と名誉とを形成した時に、異教者（外道）は以前は彼らのものであった収入と名誉を、太陽が昇った時の蛍のように光（沢）を失ったために、集まって次のような相談をした。「ゴータマの僧が世間で起って以来、我々は以前得ていた収入と名誉とを失ってしまったし、今や我々が存在しているか否か誰もわからなくなっているほどである。誰かと共に、今や彼のものとなっている収入と名誉を打破するほど賢いゴータマ僧を非難を投げかける共通の理由を作ろう？そこで次の考えが浮かんだ「遍歴しているスンダリー尼僧と共に共通の理由を作ることによって、我々は目的を達成することができる」と。

ある日、スンダリーは異教者（外道）の僧院に入り、その僧院の僧に敬礼したが、僧は彼女には口をきかなかった。彼女は繰り返し話しかけたが、応答がないので、彼らに訊いた。「高貴なお方よ、誰かが悪いことをしたのですか？」「大姉さま、僧ゴータマが悪いことをして回り、我々が以前得ていた収入と名誉とを奪ってしまったのを知りませんか？」「このことに関して私は何を為すべきでしょうか？」「大姉よ、そなたはとても美しくて見た目もよい。僧ゴータマに恥をかかせ、あなたとのゴシップを人々に繰り返しなさい。そうして彼のものとなっている収入と名誉を奪い取りなさい。」「よく分かりました、」と、スンダリーはそうすることを約束して、答えた。

それ以後毎晩人々が尊師の説法を聞いた後で町に入った頃、彼女は上着を纏い、香水をつけ、ジュタヴァナ（＝ジェータ林＝祇園精舎）

の方角へ散歩をするようになった。人々が「どこへお出掛け?」と聞くと、彼女は次のように答えるのが常だった。「ゴータマ僧の所へ、彼と香りの部屋で二人で夜をすごすのが習慣だから」と答えた。異教の僧院で夜を過ごして、早朝にジュタヴァナに向かって散歩した。人々が「スンダリー、どこへお出掛け?」と尋ねると彼女は「香りの部屋でゴータマ僧と夜を過ごし、彼に抱かれて、今その帰り道よ」と答えた。

数日後、異教者（外道）は暴漢たちに金を渡して「スンダリーを殺し、その死体をゴータマ僧の香りの部屋の近くに古着と廃棄物の山の上に投げ捨てよ」命じた。暴漢たちは命ぜられた通りにした。それゆえ異教者（外道）者は「スンダリーが見つからない」と言って色めいて声を挙げ、事態を王に報告した。王は「誰が疑わしいか」と聞き、異教者（外道）者は「この二三日、彼女は夜をジュタヴァナで過ごした、しかしそこで何があったのか我々は知らない」と答えた。「それでは彼女を捜索しよう」と王は言った。王の許可を得たので彼らは支持者を伴って、ジュタヴァナに行き、捜索をし、古着と廃棄物の間に横たわっているスンダリーの死体を発見した。担架に死体を置いて、彼らはそれを町中に運び、それから（王宮に）行き「ゴータマ僧の弟子が『尊師によってなされた悪行を隠そう』と思っている」と王に報告した。それゆえ彼らがスンダリーを殺す原因となったのであり、その死体を古着と廃棄物の中に投げ込んだのです。王は言った「でかした。町の通りを隈なく歩いて探せ」と。

それゆえ異教者（外道）は「シャカ国の王子の弟子である僧には気をつけろ」と叫びながら、彼らは町の通りを隈なく歩いた。このことと同様の効果のある他の事を異教者（外道）は町中に触れまわり、そうし終えて王宮の門の所に戻った。王は焼き場の中の広場にスンダリーの死体を置かせ、それを監視させた。サヴァッチー（舎衛城）の多くの人は、（仏陀の）高貴な弟子を除いて、「シャカ族の王子の弟子である僧の行動に気をつけろ」と叫び声を挙げた。町の内外で、公園で、森で、彼らは（仏陀の弟子の）僧を罵りながら歩き回った。僧がテタガータ（＝如来）にこのことを報告した。尊師は「それではこれらの人々をたしなめよう。そう言って彼は次の章句を発した。

三〇六　不実語者は地獄に堕ちる、あるいは悪行を犯しても「犯していない」と言う人も［地獄に堕ちる］。二人はひとしく来世において卑劣業の人たちとなる。

王は家来を送って「別の人がスンダリーを殺さなかったかを調べよ」と彼らに命じた。さてこれらの暴漢はその金を強い酒に使ってしまい、飲んでいる最中にお互いに諍いが起きた。ある者は他の者に「お前がスンダリーを一撃で殺し、彼女を殺してから、死体を古着と廃棄物の重なりの上に置いた。殺害で得た金でお前は強い酒を飲んでいる！天晴れだ！天晴れだ！すばらしい！」と。王の家来はこれらの暴漢たちを捕まえて王の前に突き出した。王は彼らに訊いた。「お前がスンダリーを殺したのか？」と。「はい、王様」「彼女を殺そうとして（お前たちを）雇ったのは誰だ？」「王様、異教者（外道）でございます。」それゆえ王は異教の僧たちを面前に呼び出し、彼らに命じた。「ゴータマ僧への非難を投げかけるためにこの婦人スンダリーを殺害させました、ゴータマ僧、ゴータマ僧の弟子には、何の咎もありません。異教者（外道）者は命ぜられた通りにし、それから愚者の多数が信じた。異教者（外道）者は殺人の罰を受け、その時からブッダへの名声はますます高まった。(9)

尊師（釈尊）への中傷・誹謗の罪に対しての罰として異教の僧にサヴァッティの町中に「自分たちがその権威を維持し、拡張させようとして、スンダリーを唆してブッダが彼女の色香に迷ったかのように言いふらさせ、また悪漢に対してスンダリーを殺害させ、その死体を香りの間に置かせて恰もブッダがやったかのようにいいふらせたことを告白させて回らせた」。尊師への殺人示唆をいう重大な悪行への罰としてはあまりにも寛大な処置ではあるが、異教と新しく興りつつある仏教との対処の違いを明確に浮かび上がらすものであろう。

地獄の章では、他に八つの逸話が挙げられている。そのいくつかを取り上げよう。

ある婦人の夫が家に住んでいた女の奴隷と密通を犯したことから物語は始まる。それゆえ嫉妬深い婦人は女の奴隷の手足を縛り、耳と眼を削ぎ、彼女を秘密の部屋に投げ込み、ドアを閉めた。それから、彼女が犯した悪事（＝evil deed）を隠そうとして、夫に「来なさい、わが背の君よ、僧院に行って、法を聞きましょう」と言った。夫を連れて彼女は僧院に行き、法を聞くために座った。

女の奴隷の縁者が、彼女に会おうとして家を訪れたときに事件は起った。彼らがドアを開け、暴行を目のあたりにするとすぐさま、彼らは女の奴隷を解放した。そこで女の奴隷は僧院に行き、四つの集団（＝比丘・比丘尼・優婆夷・優婆塞）の中に立ち、事件を十の力の所有者（＝尊師）に告げた。尊師は彼女の言明に耳を傾け、それから答えた「ひとは、些細な悪い（＝wrong）考えでさえ、起してはならない。

『わたしが犯した悪事（＝evil deed）を何も知らない』それについて他人が何も知らないとしても、人は良いことだけをすべきである。悪事（＝evil deed）については、ひとは隠していても、後に後悔がもたらされるが、良い行為は幸福以外になにも産み出さない」。そう言って、次の章句を発した。

三一四　悪作は為さぬ方がより善い。［何故ならば］悪作を［為した］後、悩み苦しむ［からである］。［しかし］善行は為した方がより善い。それを為した［後］、苦しみ悩まない［からである］。

いいことはなした方がいい、というのはいいことをした後でひとは悩まないから。

教えの結論のところで信者とその妻は改宗の果（預流果）を達成した。そのときそこで彼らは女の奴隷を解放し彼女を法の従事者とした。（＝出家させた）[10]

女の奴隷を、密通したからという理由で、その眼と耳を削ぎ取り、隠し部屋に押し込める……まるで物のように取扱う行為は、異常な嫉妬心からの行為でしかない。剰つさえ、夫を諌めるかのように、僧院で共に法話を聞く。しかし、悪事は露見に曝されてしまう。婦人の嫉妬に基づいた行為は、極めて残虐なものであるが、彼女の次生でのあり方については何も語られてはいない。おそらく、事実確認ができなかったことに依るものであろうが、「天網恢恢疎、踈而不失」に酷似している。仏教の思想が、無為を説く老子の思想に通じるところがあるとされる所以であろう。

ある僧たちが国境に行き住民の中に入り、最初の一ヶ月を楽しく過ごした事に始まる。しかし、次の月には、盗賊の一団が施しに出かけるのに慣れていた村にやって来て襲撃して住民の一部を捕虜として連れて行った。その時から（以降）、（村の）人々は僧の必要に適切に供給する機会がなくならないよう盗賊に対して国境の町を強固にするのに忙しかった。その結果、僧たちはその住まいにおいて極めて不快に過ごすことになった。

彼らが（住民への奉仕を）住居地で為し終えて、〔雨安居で〕尊師を訪問するためにサーヴァッチに帰って、尊師を訪問し、尊師に敬礼

し、恭しく傍らに座った。尊師は、彼らと親しく挨拶を交わした後、彼らに「僧たちよ、この期間を快適にすごせましたか？」と尋ねた。僧たちは「尊師、最初の一ヶ月はとても快適なものでした。しかし、盗賊の一団が村を襲った二か月目からは、住民は、我々の世話をするには機会がないほど、町を（防御を）強固にするのに多忙であった。そのために、我々には極めて不快なものでした」と答えた。尊師は「僧たちよ、気にするな、心を乱すな。いかなる時でも快適な生活を送ることは困難なことである。しかし町の人々が町を守るように、僧は自分自身を守るべきである」そう言って、彼は次の章句を発した。

三一五　内外共によく守られたる辺境の城の如く、かくの如く自己を護れ！実に［善き］機会を逃すことなかれ！実に機会を逃した者は、地獄に堕ちて悲しむ。(11)

修行僧への戒めとして、修業に集中することの重要さを説く教えであり、「自己を守ることが、修業を実のあるものとするに不可欠であることを教える。六内処と六外処を指すと、ヴィジャーナンダ・北嶋は説くが、片山は、懐奘は『玉は琢磨によりて器となる。人は練磨によりて仁となる。……古人の云く、光陰空しくわたることなかれと』の言葉で、学道への専念を説くのである。この頌偈での機会の喪失が地獄への道として提示されるのは、民衆の理解者・指導者としての僧の社会的地位・権威に基づくものであり、古代社会での僧侶の心構えとして考えられたものであろう。

地獄の章の逸話として、この章の掉尾に置かれているものを取り上げよう。

昔、異教者（外道）者の弟子が異教者（外道）者の子どもと正統な信者の子どもが一緒に遊んでいるのを見た。異教者（外道）者の子どもが家に帰った時、「サキヤ（釈迦族）の王子の弟子である僧に敬礼することも、その寺院に入ることもお前らは禁ぜられている」と言った。そして彼らはそれを実行に移すべく誓わせた。さてある日、壁で囲まれた平たい屋根のある門の近くのジュタヴァナの僧院の外で遊んでいる時に、彼らは咽喉が渇くのを感じた。そこで彼らは信者の息子を僧院にやり、彼に言った。「そこに着いたら水を飲み、我々にも水を持ってきてくれ」と。少年は僧院に行き、尊師に敬礼し、彼にすべてのことを話した。

そこで尊師は彼に言った。「君が水を飲んだら、戻って他の少年にもここで水を飲むように」と。そこで少年たちすべてがやって来て水を飲んだ。そこで尊師はかれら（＝少年たち）すべてを自分の周りに集めて彼らにわかるような主題を選んで、動かすことのできない忠誠で彼らを分け、彼らを忠誠者と拒絶者（との）区別を打ち立てるという、法を彼らに説いた。彼らが家に戻った時、彼らは母親と父親に事のすべてを話した。だから彼らの父親と母親は悲しみを堪えられず泣いて泣き叫んで、「うちの息子は誤った忠誠を選んでしまった」と言った。さて近隣の賢人と言われる人は近くに寄り、彼ら（親）に法を説いた。法を聞いた後で、彼らは「私たちはゴータマの僧だけのお世話になります」と言った。そして更に親族の大きな集団に出席して彼らを僧院に押し掛けた。尊師は彼らの心の傾向を考えて、次の章句を発しながら法を説いた。

三一八　罪のなきを罪ありと思念する、あるいは罪ありを罪なしと見る。［この］邪見を受持する有情たちは、悪趣に行く。
三一九　罪ありを罪ありと知る、あるいは罪なきを罪なしと［知る］、［この］正見を受持する有情たちは、善趣に行く。

邪見と正見を対置させて、悪趣へ赴く者と善趣へ赴く者とを峻別する偈で要約されているが、逸話は子どもへの見解の押しつけとその根拠となる親たちの態度を語るものである。仏陀は、自ら諭すのではなく、第三者的立場にある近隣の賢者の説得に委ねている。その上で、法話を聞かせ、従前の見解の過ちを見出すこととしている。

この背後に「八正道」が位置づけられている。「八正道」は善趣へ赴く道であるとするのである。邪見とされる、誤った見解というよりも、偏見という狭い見識に基づく行為を諌めて、大局的な見解を保ち、それに基づいて生活態度を改めると考えれば、宗教的な見解から解き放たれるようにも思われる。(12)

『ダンマパダ』には、「地獄の章」以外にも地獄に関連する出来事について言及している。

ある日、コーサラ国のパセナディ王が祭りの日に町に出掛けた。その時、王は高楼の最上階に美しい女性が窓から出て王を見ているのを

知った。ほんの一瞬であったがその婦人のことが気になり、その婦人の身辺調査を命じた。婦人は既婚者であったが、王は何とかものにしたいと強く願った。そしていろいろ考えた末、彼女の夫を宮廷に召し抱えて無理難題を押しつけ、彼を罪に陥れて殺す計画を立てた。最初に、王は大臣に命じて、夫を宮殿に連行させ、いやがる夫を召し使いにしてしまった。その上である仕事を命じた。その仕事とは、ここから遥か離れた所にあるクムダ（白睡蓮）とウッパラ蓮華（青睡蓮）、そして暁明色した土を王が沐浴する夕方までに宮廷に持ち帰ることであった。「もし時間に間に合わなければ、死刑にするぞ！」と厳命され夫はこの命令を断ることができず、早速妻の手作り弁当をもってわが家を出発した。途中、腹がすいた彼は川辺で弁当を食べはじめ、一人の旅人に声をかけて自分の弁当を分け与えた。そして食べ残ったご飯を夫は川に住むものたちにも施し、「この川に住んでいる龍よ、金翅鳥よ、女神よ、私の言葉を聞いてください。パセナディ王は私の妻を奪うため無理難題を私に命じました。どうか私を助けて下さい。私は一人の旅人にご飯を施し、水中で生きるものたちにも施しをしました。これらの善業の報果をすべて貴方にあげます。どうか、クムダとウッパラ蓮華そして暁明色した土を私に持って来て下さい」と大声で三度叫んだのである。この悲痛な叫び声を聞いた龍神は、この男を哀れみ、老人の姿に変身して彼が望むものを手渡した。夫は約束通り自分の善業の果報をこの老人に与えた。その頃、パセナディ王は定刻より早く町の門を閉めて男が入れないようにした。そのため夫は定刻ちょうどに町に到着したにもかかわらず町の中にはいることができず、しかたなく町を離れて仏陀のおられるジェタヴァナ僧院をたずね、そこで休むことにした。その夜、パセナディ王は自分の思い通りに計画がすすみ、その後の楽しみを考えると興奮してなかなか眠ることができなかった。そしてようやく眠りについた王は、恐ろしい夢に苦しめられるのである。その夢とは、銅釜地獄に生まれ変わった四人の男が銅釜の中で煮られながら、『ドゥ』『サ』『ナ』『ソ』と発しては苦痛に顔を歪めながら釜の下へ沈んで行くのであった。夢からさめた王は恐怖に身体を震わせ、「私はたいへん不吉な夢を見た。私の命があぶない！」と叫ぶや占い師を呼び寄せ、昨夜の夢について意見を求めた。「王様、これはたいへん悪い卦でございます。しかし、私の言うとおりになればもう安心です」と言って占い師は象・馬・牛・鶏・少年・少女など各百ずつの生け贄を神に捧げれば王様の命は助かると助言した。これを信じたパセナディ王は盛大な生け贄儀式をはじめ、そのために国中から悲痛の声がわき上がった。王妃マッリカーはこの馬鹿げた占いによって多くの人が不幸になることを憂い、死の影におびえる王の愚行を止めさせようとパセナディ王を仏陀のところに連れて行った。パセナディ王はあの夜の夢を仏陀に話した。仏陀は、「王よ、

昔、四人の富豪がいた。彼らは遊び友達であり、毎日お金にものを言わせて美味しい酒や豪華な料理をたべては高級娼婦や人妻と遊びほうけ、やがて人生を終えた。死後、この四人は銅釜地獄に堕ちた。この地獄は途方もなく深く、三万年かかってその釜の一番底に達し、さらに三万年かかって釜の口に浮かび上がるというものである。地獄に堕ちた四人はやっと釜の口に浮かび上がった時、自分の今の心理を述べた詩偈の最初の部分の語だけを『ドゥ』『サ』『ナ』『ソ』と発音しただけで又釜底に沈み始めたのである。しかし、彼らは銅釜地獄に堕ちてまだ千年しか過ぎていない」と語られた。この説法によってパセナディ王は他人の妻を横取りすることの恐ろしさを理解した。そして仏陀は、「眠られぬ人にとって夜は永い。疲れた旅人にとって一ヨジャナ（1yojana＝約14km）は長い。正法を知らない愚かな人にとって輪廻は永い」と説かれたのである。

また、マリッカー妃の前世の行動に因んで、ベナーレス王とディンナ女王の話をされた。

遠い昔のことである。ある王子が、菩提樹の木に近づき、そこに住む木の精に「この国には百人の王と百人の女王がいる。もし父親が死んで、私が王国を継承したなら、これらの王と女王の血で貴方に捧げ物をしよう」との誓いを立てた。王が死んで、彼が王国に入った時に、彼は「この木の精の超自然的な力のお蔭で私は王国を継承した。私は木の精に捧げ物をしなければならない」と考えた。そこで彼は大軍を率いて出発し、一人の王を征服し、征服された王の援助で次から次へと王を征服し、最終的には全ての王が彼の軍勢に降った。そこで、彼は、百人の王と百人の女王を引き連れて、木の所に赴いた。

彼が行軍する時に、彼は「最も若い王の第一夫人の、ディンアは子どもがあるが立派である。だから私は彼女を生かしておこう。しかし残りの者は毒を飲ませて殺してしまおう」と独り言を言った。彼が木の下で理由を明らかにしたので、木の精は「この王はこれら全ての王を引き連れて私に私の支援で彼らを捕らえたとの彼の確信の故に彼らの血で私への捧げものをする準備をしている。しかしもし彼が彼らを殺すのなら、この国の王の蓄えは根こそぎにされ、木の根元は汚されてしまうだろう」と考えた。

木の精は彼が王の意図を阻止出来るかどうか自問した。自分で阻止はできないことを知ると、木の精は他の木の精の所へ行き、事態を説明し、彼に阻止できるかを訊ねた。彼からも否定的な見解を示されると、更に別の木の精の所に行ったが、結果は同じであった。それから彼は全てのチャッカヴァーラの神々の所へ行ったが、彼らも彼のためには何も出来なかった。最後に木の精は四人の偉大な王の所に出向い

た。彼らは彼に、「我々は何も出来ないが、我々の王は利益のある行為でも智慧でも我々より勝れている、彼に尋ねなさい」と言った。そこで彼はサッカ（帝釈天）の所に行き、彼に事態がどんなものであるかを話した。「サッカよ、もしあなたが安逸で無関心な態度をとり続けるならば、そして王子の蓄えは根絶やしにされ、あなたはそれに対して責任があることになろう」と、彼は言った。

サッカは、「私は彼を阻止することは出来ないが、どうしたら彼を阻止することができるかを教えましょう。夜着を纏い、あなたの木から王から見える平原に進んで行き、あたかもあなたが去って行くように行動しなさい」。王は、自分に『木の精は行ってしまった、私は彼を止めなければならない』と言い聞かせ、あなたをここに留めておくためにあらゆる努力するであろう。そこであなたは彼に、『あなたは私に、『私は百人の王と百人の女王とを連れて来てあなたに彼らの血で捧げ物をします』との約束をする』と言うでしょう。しかしあなたはウッガセナ王の第一夫人を連れては来なかった。私は嘘つきの捧げ物は受け取れません」と言うのです。王はあなたがそう言うのを聞くと直ぐに、王はウッガセナの第一夫人の、女王ディンナを連れて来ようとするだろう。彼女は法律上の王に教え、この数多くの集団の人々の生命を救うだろう」。このようなことがサッカが木の精に示唆した策略であった。

木の精はサッカが示唆したように行動し、王は直ちに女王ディンナを連れて来た。彼女は、彼が百人の王の外側に座していたにも関わらず、自分の配偶者である、ウッガセナ王に近づき、彼に対してのみお辞儀をした。ベナーレスの王は彼女に対して感情を害して、「最年長の私がここにいるのに、彼女は全員のなかで最年少の者へお辞儀をした」と独り言を言った。その時に彼女はベナーレスの王に「私はあなたに忠誠を誓いましたか？この者は私にとっては支配権の授与者です。どうして私が彼の所を通り過ぎあなたにお辞儀をすべきなのでしょうか？」と言った。

木の精は集まった群衆の目の前で、「善く仰せられた、王様！善く仰せられた王様！」と叫びながら一握りの花で彼女を賞賛した。

再びベナーレスの王は彼女に「もしあなたが私にお辞儀をしないのなら、どうして偉大で不思議な能力をもち、私に支配権と王位を授けた木の精にお辞儀をしないのか？」「王様、それは、これらの王を征服した、あなた自身だけの利益で、木の精は彼らを征服したのでも彼らをあなたの掌中に与えたのでもありません」再度、木の精は、「善く仰せられた、王様！」と言いながら、彼女を称えた。再度彼女は王に「あなたは、『木の精はこれらの王を征服し、彼らを自分の掌中に入れた』と言われました。たった今木はあなたの魂の左側で火で燃え

ています。もしあなたの魂があのような偉大で不思議な力をもっているのなら、どうして彼はあの火を消すことができないのでしょうか?」再び、木の精は、「善く言われた、王様!と言いながら、同じ方法で彼女を称えた。

女王は話す時に、彼女は泣き笑いをした。王は「あなたは狂ってしまった」と言った。「王様、どうしてこのようにおっしゃるの?私のようなものは狂ってなんかいません」「それならどうしてあなたは泣き笑いをするのか?」「王様、私の話をお聞きなさい……」

昔、私は良家の娘として生まれ変わりました。夫の家で生活する間に、夫の親しい友人が客として招待されました。彼を見たとき、私は彼のために食事を作りたいと思いました。そこで召使に一ペニー与えて『肉を買ってきて』と言いました。彼女は何にも買うことができず、彼女が戻った時に、私に買えなかったと言いました。さて家の裏には雌羊が飼育されていました、私はその頭を切り食事を準備しました。私が、雌羊の頭を切ったために、私は地獄に生まれ変わりました。私の悪事の果がまだ尽きなかったので、地獄での苦痛に悩まされた後でさえ、私自身の頭は雌羊の羊毛のように髪の毛が何度も刈り取られました。今これらの人々すべてを殺すことを想像してごらんなさい。あなたは何時になったら苦痛から解放されますか?私は私が耐えてきた大きな苦痛を思い出したので泣いたのです。そう言いながら彼女は次の章句を暗誦した。

私が一匹の雌羊の頭を切ったので、私は雌羊の羊毛が刈り取られるように何度も髪の毛を切り取られると悩まされている。
もしあなたがそれだけ多くの生き物の頭を切ったなら、王子よ、あなたはどのように暮らして行くのか?

「しかしどうして笑ったのですか?」「王様、この苦悩から解放されたという感覚を得た喜びのためです」再び木の精は「善く仰られた、ご主人様」と言いながら一握りの花をもって彼女を称えた。

王は「ああ、なんという重大な罪をおこそうとしていたことか!この女王が雌羊を殺したので、彼女は地獄に生まれ墜ちた。彼女に今もなお残っている苦痛で、彼女の髪の毛は雌羊の羊毛のように何度も刈り取られている。もし私がこの人間を殺したなら、何時私は自分の罪から解き放なされるのであろうか?」そこで彼は捕虜の王をすべて解放し、彼より年長の者にお辞儀をし、彼より若い者には手を恭しく握

り、彼らに許してくれるよう願い、自分の領土に帰って行かせた。

尊師がこの物語と関連して、「このように、僧たちよ、これはマッリカーがその智慧で数多くの人々の命を救ったことは、これが初めてではない。前世でもそうした」と言った。また彼がそう言った時、過去の物語の性格と同一化して次のように言われた「ベナーレスの王の時代にはパセナディ・コーサラは女王マッリカーのディンナであり、木の精は私自身であった」とも明らかにした。また過去の物語での人物を同一化して、法をさらに教えて、「僧たちよ、生きている動物の命を奪うことは法に逆らうものではない。長い間悲しんでその命を奪っている者も」と言いながら。そう言いながらかれは次の章句を発した。

もし人々が苦悩は、誕生の起源をこの世にここで生まれたことにあると理解するなら、どの生き物も他者の命を奪わずにはおられないであろう、彼が命を奪うことは悲しいことなのだ

引用が長くなったが、この一連の逸話に示されるのは、先ず他人の妻に横恋慕し、権力を振り回してその意を遂げようとする王の逸話である。王は自分の邪な慾を満たすために、婦人の夫が邪魔となり、殺害の口実を設けようとする。王は嫌がる夫を宮殿の召し使いとして雇い、更に彼に一リーグ（約14km）離れた川岸のある場所から白睡蓮と青睡蓮と暁明色の土を探し出し、定められた刻限までに宮殿に届けよとの命令を夫に降す。それが出来なければ死刑に処すとの言明をも加えて。手弁当を携えた夫は、途中で弁当を食べるが、通りかかった旅人や流れに棲む動物たちにもその一部を与える。流れに棲む龍神は老人に変身して夫の願いを叶え、夫にクムダ（白睡蓮）とウッパラ蓮華（青睡蓮）、そして暁明色した土を与える。夫はそれらを持って王宮にむかったが、定刻前に城門は閉ざさせれてしまっていた。持ってきた土を城壁に投げつけ、門に花をぶら下げて、夫は「王は正当な理由もなく私を殺そうとしている」と大声で叫んだ上で、仕方なく僧院でくつろごうとする。

一方、王は策略が成功したとほくそ笑み、憧れの女性との情交に胸を膨らませながら、眠れぬ一夜を過ごすことになる。王が「夜が明ければ、あの男を殺し、宮殿に件の女を連れて来よう」と独り言を言った。その瞬間に、彼は奇妙な四つの音を聞くのである。音ばかりでな

く、銅の大釜の中に四人の男が茹でられ手足をバタつかせながら、単なるシラブルだけの音を発している光景も見た。一睡もできなかった王は、夜明けとともに、バラモン僧を呼び、前夜の出来事を彼に話した。バラモン僧は、四つの音は、死の前兆であると告げ、それを逃れるために百頭の象、百頭の馬等の生け贄をして捧げることを求めた。王は、生け贄を集めることを命じ、民衆は罰を恐れて生け贄を集めようとして大騒ぎになった。この騒動を聞き付けたマッリカー妃は、「自分の死を他者の死で救うことは出来ないとして、近くの僧院に居られる尊師の所に王を連れて行った。尊師は、恐怖で口の利けない王に代わってマッリカー妃から事情を聞いて、過去譚を語り始める。カッサパ仏の時代に、ベナーレスの町にいた豊かな商人の四人の息子のことを話しはじめた。彼らはその資産をどう使うかについて話し合ったが、四人の出した結論は、「他人の妻に金を与えて不貞を働く」ことに費やすものであり、二万年間不貞を働いた末に死んだ。彼らは死後、アヴィチ地獄に生まれ変わり、鉄釜で、浮き沈みしながら、シラブルだけを発しながら、手足をバタつかせて蹠いている。そのシラブルを置き換えると

我々は財産があったにも関わらず、施しをせず、又自分の心のより所を作らなかった。そのために今我々は苦しみの生活を送っている。

王にこの章句の意味を分からせるために、尊師は、彼が聞いた別の音を聞いた。王が彼にそれを話した時、彼は残りの部分を次のように完成した。

六万年間我々は地獄の中で茹でられている。いつこの苦しみは終わるのだろうか？

まだ地獄の苦しみが続く！いつ終わるのだろうか。何の前兆もない。我々は前世において悪行を犯し、その悪行の報果がまだ清算されていない。

それ故、私は誓約します、地獄から人間界に生まれ変わったならば、賢者の教えを聞き、戒律を守り、多くの善行をおこなうことを。

六〇　眠られぬ人にとって夜は永い。疲れた［旅人］にとって一ヨジャナは長い、正法に無知である愚者にとって輪廻は永い。[14]

二つ目の逸話は、木の精の助けを得て王位を継承し、王国の長となったベナーレスの王とディンナをめぐるものである。年長者に対する

敬意と今日の地位を授けた者への敬意という構図で、自分にとっての利益の点から地位を授けた者への敬意を優先させることで、世間の常識への挑戦の様相を呈するものであるが、更に第三の逸話を挿入することで、その理由を明確にしようとする。第三の逸話は、夫の友人を招待した際に、客へのもてなしとして食事を提供しようとした妻が、食材に困り、飼っていた雄羊を殺したが、死後、地獄に堕ち、地獄で苦痛を味わったばかりか、その報果が尽きず、今なお何度も髪の毛を切り取られることに悩まされている。この話を聞いた王は、同行した王、女王が捕虜として連れて来たものであり、やがては殺害しようとしていたことの非を悟り、自分たちの領地に戻させることにしたとの逸話である。この逸話の最後で、ベナーレス王は、パセナディであり、デンナーは女王マリッカーであり、木の精は尊師自身の前世の姿であると種明かしもしており、この世で現在存在していることの苦悩はその起源を誕生にあることを理解するならば、いかなる生き物も彼が命を奪うことで、気の毒に思うので、他者の命を奪うべきではない」との章句を唱えるのである。

この一節について片山は「すべてを放下し、寂靜の道を行くべきである」ものと示し、山田無文師は「正法を知らない愚か者にとっては、妄想と執着のつきぬ迷いの世界は、果てしなく長いことであろう。……法とは心のキマリである。純粋にして普遍的な人間なら、誰でも持っておる人間性そのものである。つまり正法とは、真実の人間、われのことである。」この無文師の指摘されるように地獄の描くことで、人間としての真実に姿を求めることが不可欠であると説くのである。『ダンマパダ』の章句一つ一つが説く意味でもあり、『ダンマパダ』全体が、仏教の人間観・世界観に即して、人間のあり方を説き続けるものであろう。

逸話にはアヴィチ地獄の凄まじい様相が如実に描かれている。それは地獄の釜とも表現され、阿鼻地獄、無間地獄とも表現され、間断なく苦しみに苛まれる地獄である。ここで取り上げた四兄弟のシラブルは発音できるが、まとまった章句は唱えられないという状況がその様相を示している。

仏陀への攻撃、策略を用い、その社会的地位と名声を我がものとしようとしたデーヴァダッタも地獄に堕ちた一人とされ、彼に唆された阿闍世王、我が子ヤソーダラが寡婦同然にされて、仏陀に対して憎しみの火を燃やし続けたスッパブッダの逸話についても言及したいが、紙数が尽きたので、別の機会に稿を興したい。

註

（1）水野弘元著『パーリ語辞典』一七六頁

（2）荻原雲来編纂・辻直四郎協力『梵和大辞典』六八二頁

（3）荻原雲来編纂・辻直四郎協力　前掲書　六六九頁

（4）Prin Vaman Schivaram Apte ‘The Practical Sanskrit-English Dictionary’ p.880

（5）いわたちせいごう氏の管理する「RMC」のHPに記載されている岩本裕の『地獄と極楽』からの抜き書きによる。岩本裕『地獄と極楽』一六三頁ここでカタカナで表記されている語は、シュメール語のクル（kur or nu gi a＝「戻ることのない土地（不帰の国）アッカド語ではirṣitu lā tāri＝冥界」へブライ語でのシェオール（She’ōl（or Sheol）and Gehinnom, or Gehenna（Hebrew: gê-hinnōm）ギリシャ語のハァーデース（Ἅδης Hades）アラルルーはarallu（アッカド語での発音による）

（6）‘Encyclopedia of Britanica’ 2011判のHellの項目

（7）矢島文夫訳　『ギルガメッシュ叙事詩』所収の「イシュタルの冥界下り」では

［エレシュキガルの］領域なる冥界にむけて

シンの娘イシュタルは彼女の心を［さだめた］

シンの娘イシュタルは、まさに［彼女の］心を［さだめた］

イルカル［ラ］の住まい、『暗黒の家』へ

入る者は出ることのない家へ

歩み行く者は戻［る］ことのない道へ

住む者は光を奪われる家へ

そこでは埃が彼らの御馳走、粘［土］が彼らの食物で

光を見ることもなく暗闇のうちに住［む］

鳥のようにつば［さ］のついた着物を着る

と訳されている。矢島文夫訳『ギルガメッシュ叙事詩』二一七頁

（8）興味深いことに『ダンマパダ』の漢訳の『法句経』は地獄品の冒頭には次の文章が添えられている。「地獄品者。道泥梨事作悪受悪牽不置」

（9）Eugene Watson Burlingame ‘Buddhist Legend’ vol.3　pp.126～128　を底本とし、Ven Weragoda Sarada Maha Thero ‘Treasury of Truth’ を参考にしつつ、ウ・ヴィジャーナンダ大長老監修　北嶋泰観訳注の『パーリ語仏典　ダンマパダ』、及び片山一良著『ダンマパダ』を参考とした。

頌偈の原文は、

Abhūtavādī nirayṁ upeti　　yo vāpi katvā na karomi’ cāha

ubhopi te pecca samā bhavanti　　nihīnakamma manujā parattha.

である。因みに『法句経』では

妄語地獄近　作之言不作　二罪後俱受　是行不自禁

と訳され、邦語では

A　いつわりを語る人、あるいは自分でしておきながら「わたしはしませんでした」と言う人、―この両者は死後にはひとしくなる、―来世では行ないの下劣な業をもった人々なのであるから。（中村元「ブッダの真理のことば、感興のことば」より）

B　三〇六　不実（いつわり）をかたりて　悪処に入り
　　自ら作（な）して　「われは作さじ」という
　　これら両者の　賤しき業（なりわい）のもの
　　のちにひとしく　悪処に入らん（友松圓諦『法句経』）

C　誰でも虚偽を語る者、また行なったのちに、「わたしはしない」という者は、地獄に行く。この両者はまた相ひとしく、他の世で賤しい行為をなす人びととなる。（宮坂宥勝　『仏教箴言集』）

D　クドンの弟子らは　つねによく
　　醒めてあれば　昼も夜も
　　心しずかに　安らかならん（山田無文　『法句経　真理の言葉』）

E　嘘をいう人よ　また自分のしたことを
　　「わたしはしなかった」　というひとよ
　　これらはふたりとも　揃って仲よく地獄行き（瀬戸内寂聴　『寂聴　生きる知恵』）

F　嘘をつく者は地獄に墜ちる　犯して「犯さず」と言う者も
　　両者はともに悪業の人　行ってあの世で同類となる（片山一良　『ダンマパダ』）

ここでの頌偈の訳文は　ウ・ヴィジャーナンダ大長老監修　北嶋泰観訳注の『パーリ語仏典　ダンマパダ』によった。

この逸話に因んで、ウ・ヴィジャーナンダ大長老監修　北嶋泰観訳注の『パーリ語仏典　ダンマパダ』は、次のような註を付している。

地獄（niraya）：多くの不善業を犯した人は、臨終時意門に業・業相・趣相の中の一番強いものが所縁としてあらわれ、十二不善心（22）～（33）の中の随一な不善心が速行作用をおこない、この速行心と応じる欲界不善因異熟意識界によって地獄に結生する。地獄は瞋恚によって堕ちると言われる。

①蘇生地獄（saṁjīva-niraya）：熱鉄板上において身体を切断されて何度も蘇生し、また同じ苦しみを受ける。その寿量は四大天天衆の五百倍。

②黒縄地獄（kalā-sutta-niraya）：ちょうど大工が墨縄を引き材木を鋸で細かく切るように、線を引いた後、罪人が切断される。その寿量は三十三天衆の千倍。

③圧縮地獄（saghāta-niraya）：罪人が二つの山に挟まれ圧縮される。その寿量は夜摩天衆の二千倍。

④叫喚地獄（roruvana-niraya）：金バサミでこじ開けられた罪人の口に灼熱の銅汁が流し込まれる。その寿量は都率天衆の四千倍。
⑤大叫喚地獄（mahāroruva-niraya）：その寿量は楽変化天衆の八千倍。
⑥焦熱地獄（tāpana-niraya）：その寿量は他化自在天衆の一万六千倍
⑦大焦熱地獄（mahātāpana-niraya）：その寿量は中劫の半分
⑧無間地獄（avīci-niraya）：上の七つの地獄は苦痛が時々途切れることがあるが、この無間地獄は絶え間なく続く。その寿量は中劫である。

卑劣業の人たち（nihīnakammā　manujā）：悪行を重ねる人たちを意味する。

岩波書店の『仏教語辞典』では「八大地獄」を次のように解説している。

八熱地獄「八大地獄」ともいう。仏教の説く諸々の地獄のなかでも、最もよく知られた八種の地獄。
1）責苦によって命絶えても、また蘇生しては責苦を受けるという「等活（とうかつ）地獄」、
2）鉄の黒縄で身体を巻かれ、それに沿って切り刻まれる「黒縄（こくじょう）地獄」、
3）鉄の臼に投げ込まれて鉄の杵で打ち砕かれるなどする「衆合（しゅごう）地獄」、
4）湯の煮えたぎる大釜に投げ入れられるなどして叫声を発する「叫喚（きょうかん）地獄」、
5）同種の責苦により、なお一層の苦しみを受ける「大叫喚（だいきょうかん）地獄」、
6）猛火・炎熱のために苦しむ「焦熱（しょうねつ）地獄」、
7）さらに一層の猛火・炎熱の苦しみを受ける「大焦熱（だいしょうねつ）地獄」、
8）間断のない極限の苦しみに身をさいなまれる「阿鼻（あび）地獄」（無間（むけん）地獄とも）、の八種。地下一千ヨージャナ（由旬（ゆじゅん））に等活があり、以下順に層をなして最下の阿鼻に至る。

これらの地獄には殺生（せっしょう）・盗み・邪婬（じゃいん）などの破戒（はかい）行為により堕ちるものとされ、特に父母や聖者を殺害し、また仏の教えを誹謗（ひほう）するなどの重罪（五逆罪（ごぎゃくざい））を犯した者は、最低最悪の阿鼻に赴くとされる。これらの八熱地獄はおのおの四つの門を持ち、その門外には四種の「増（ぞう）地獄」（副地獄、すなわち眉挽（とうえ）・屍糞（しふん）・鋒刃（ほうじん）・烈火（れっか））が付随するという。八熱地獄の原型はヒンドゥー教のなかに見られるが、それが仏教に取り入れられ、仏教的な因果応報（いんがおうほう）の理論のもとに新たに説明されたものである。

（10）Eugene Watson Burlingame 'Buddhist Legend' vol.3　p.130　を底本とし、Ven Weragoda Sarada Maha Thero 'Treasury of Truth' を参考にしつつ、ウ・ヴィジャーナンダ大長老監修　北嶋泰観訳注の『パーリ語仏典　ダンマパダ』、及び片山一良著『ダンマパダ』を参考とした。

原文は
Akataṃ dukkaṃ seyyo　　pacch tapati dukkataṃ
Kataca sukataṃ seyyo　　yaṃ katvā nānutappati
漢訳『法句経』は

爲所不當爲　　然後致欝毒　　行善常吉順　　所適無悔耒
其於衆悪行　　欲作若已作　　是苦不可解　　罪近難得避

A　悪いことをするよりは、何もしないほうがよい。悪いことをすれば、後で悔いる。単に何かの行為をするよりは、善いことをするほうがよい。なしおわって、後で悔いがない。

B　あしき行（おこない）は　　作さざるをよしとす
そは　　のちに悩むべけらばなり
善き行こそは　　なすをよしとす
これすなわち　　悔いなければなり

C　してはならないことはしないほうがよい。悪いことをすれば、後に苦しむ。だが、善いことはするのがよい。悪いことをすれば、後に苦しむ。だが、善いことはするのがよい。行なって後に苦しむことがない。

F　悪事はなさぬことがよい　　後に悪事が苦しめる
また善事はなすがよい　　なした後に苦しみなきゆえ

(11)　Eugene Watson Burlingame ‘Buddhist Legend’ vol.3　p.131　を底本とし、Ven Weragoda Sarada Maha Thero ‘Treasury of Truth’ を参考にしつつ、ウ・ヴィジャーナンダ大長老監修　北嶋泰観訳注の『パーリ語仏典　ダンマパダ』、及び片山一良著『ダンマパダ』を参考とした。

原文は

Nagaraṁ yathā paccantaṁ　　guttaṁ santarabāhiraṁ
Evaṁ gopetha attānaṁ　　khṇao ve mā upaccagā
Khaāttā hi socanti　　nirayamhi samappitā

漢訳『法句経』は、

如備邊城　　中外牢固　　自守其心　　非法不生　　行缺致憂　　令墮地獄

A　辺境にある、城壁に囲まれた都市が内も外も守られているように、そのように自己を守れ。瞬時も空しく過ごすな。時を空しく過した人々は地獄に墜ちて、苦しみ悩む。

B　辺疆（くにざかい）の域は　　かたく守らる
内も外も共に　　自己（おのれ）をまもるべし
かくのごとく　　さなくば
瞬時（またたき）もゆるがせにせざれ　　うれいかなしまん
悪処に至りて

C　辺境の都城が内外（うちそと）より守られるように、同様に自身も守れ。一瞬たりとも、のがしてはならない。時機を失すれば、人びとは

地獄に陥って憂える。　　後に悪事が苦しめる

F　悪事はなさぬことがよい　　なした後に苦しみなきゆえ

また善事はなすがよい

(12) Eugene Watson Burlingame 'Buddhist Legend' vol.3　p.132　を底本とし、Ven Weragoda Sarada Maha Thero 'Treasury of Truth' を参考にしつつ、ウ・ヴィジャーナンダ大長老監修　北嶋泰観訳注の『パーリ語仏典　ダンマパダ』、及び片山一良著『ダンマパダ』を参考とした。

原文は

Avajje　vajjamatino　　vajje　cāvajjadassino

Micchādiṭṭhisamādānā　　sattā　gacchanti　duggatiṁ

Vajjañca vajjto atvā　　avajjaca　avajjato

Sammādiṭṭhimādānā　　sattā　gacchanti　suggatiṁ

漢訳『法句経』では

可避不避　　可就不就　　翫習邪見　　死墮地獄

可近則近　　可遠則遠　　恒守正見　　死墮善道

A　三一八　避けねばならないことを避けなくてもよいと思い、避けてはならぬ（必ず為さねばならぬ）ことを避けてもよいと考える人々は、邪な見解をいだいて、悪いところ（地獄）におもむく。

三一九　遠ざけるべきこと（罪）を遠ざけるべきであると知り、遠ざけてはならぬ（必らず為さねばならぬ）ことを遠ざけてはならぬと考える人々は、正しい見解をいだいた、善いところ（天上）におもむく。

B　三一八　避くべからざるに　　さくべしと惟（おも）い

さくべきに　　さくべからずと見る

かかる邪（よこしま）の見（おもい）に　　執念（しゅうね）き衆生（ひと）は

わざわいの途（みち）に　　おもむくなり

三一九　避くべきを　　さくべしと知り

さくべからざるを　　さくべからずと知る

かかる正しき見（おもい）を　　いだく衆生（ひと）は

さいわいの途（みち）に　　おもむくなり

C　三一八　罪（＝避けなくてはならないこと）がないことを罪があると思い、罪があることを罪がないと見る者たちは誤った見解を有し、悪しき所（＝地獄）へ行く。

三一九　罪（＝避けなくてはならないこと）を罪と知って、罪がないのを罪がないと知る者たちは正しい見解を有し、善き所（＝天界）に行く。

F　三一八　罪なきものに罪を思い　　罪あるものに罪を見ない
　　邪な見を懐いている　　生けるものらは悪道に行く
　　三一九　罪あるものを罪ありと　　罪なきっものを罪なしと知る
　　正しい見を懐いている　　生けるものらは善道に行く

この逸話に関して、ウ・ヴィジャーナンダ大長老監修　北嶋泰観訳注の『パーリ語仏典　ダンマパダ』は次の註を付している。

罪ありを罪なきと思念する（avajje vajjamatino）：十善行・十善業を悪行と思う邪見

罪ありを罪なしと見る（vajje cāvajjadassino）：十不善業を罪なしと見る邪見

正見（sammādiṭṭhi）：世間八聖道の正見と出世間八聖道の正見の二つがある。その自性は五十二心所の慧である。悟りを得ていない凡夫や比丘の場合は世間八聖道の正見である。しかし、五根の信（saddhā）が正見の代わりとなることはない。正見と信とは別である。先ず自分が選んだ敬い尊敬できる師匠が説く帰依三宝・因果業報・四聖諦の教理などを信じることから仏道修行がはじまる。その教えを理論的に理解するために仏典の学習をおこない、一切の有情にとって業だけが自分のものである（業自性：kammassakatā）と正見して、観の修習によって自己の内外の名色法が無常・苦・無我であると如実に随観できるように修行に集中する。そして自ら悟りの智慧を得ることができ、四聖諦などの真理が観えた時、はじめて世間八聖道の正見から本来の正見である出世間八聖道の正見となるのである。この正見は悟りの道・果と相応する慧である。

（13）Eugene Watson Burlingame ‘Buddhist Legend’ vol.2　pp.100～111　を底本とし、Ven Weragoda Sarada Maha Thero ‘Treasury of Truth’ を参考にしつつ、ウ・ヴィジャーナンダ大長老監修　北嶋泰観訳注の『パーリ語仏典　ダンマパダ』、及び片山一良『ダンマパダ』を参考とした。

原文は

dāghà jàgarato ratti,　　dāghaṁ santassa yojanaṁ,
dāgho bàlànaṁ saṃsàro　　saddhammaṁ avijànataṁ

漢訳『法句経』では

不寐夜長　　疲惓道長　　愚生死長　　莫知正法

A　眠れない人には夜は長く、疲れた人には一里の道は遠い。
　正しい真理を知らない愚かな者どもには、生死の道のりは長い。

B　眠りえぬものに　　夜はながく
　つかれたるものに　　五里の路（みち）はながし
　正法（まこと）を知るなき　　おろかの者に

生死（ひと）の輪廻（よ）は　ながからん
C　目ざめて起きている者には夜が長く、疲れた者には僅かな道のりも長い。正しい真理を知らない愚かな者には輪廻（＝迷い）は長いものである。

D　ねむれる者に　夜はながく
つかれし者に　道とおし
おのれを知らぬ　おろかには
まよいのこの世　長からん

E　眠れない者には
夜はとても長い
疲れきった者には
道はとても長い
愚かな者には
一生はとても長く
人生の正法（しょうほう）を
ついに知ることはない

F　眠れぬ者に夜は長く　疲れた者に道は遠い
正しい法をよく知らぬ　愚かな者らに輪廻は長い

この逸話に関して、Ven Weragoda Sarada Maha Thero Treasury of Truth‘は‘saṃsāra’の語に註を付している。

saṃsāra（輪廻）：生から［他の］生への生き物の永遠の旅、誕生、死及び再生の悪い循環を、仏教徒は終結をつけることを熱望する。仏教徒は再生を生の継続とは考えず、死の不朽として考える。我々は再び死ぬことを定められて再生する。「永遠の生」は幻想である。生は、誕生、加齢（老化）および死でしかない。仏教徒にはその継続は歓迎されない。仏教徒の目標は、それは「永遠の生」から明白に区別される唯一の可能な現実性をもつのであるが、「不滅」もしくは「不死」である。ニッバーナ（＝Nibbāna＝涅槃）である、不死は、再生をとおしてではなく、生の停止を通してのみ達成される。これは存在もしくは生存物の消滅ではない：というのは生存物もしくは「存在」は幻想に過ぎないので（無常）。生存物の幻想の排除とそれに対する愛着を断ち切ることである。（二九〇頁）

これについてウ・ヴィジャーナンダ大長老監修　北嶋泰観訳では、生きとし生けるものは様々な形態の「生」を繰り返し、そのたびに生老病死の苦しみを受ける。又すべての生き物は善悪の業報に支配され、この世でひどい悪行を犯した人は、死後、地獄・餓鬼・畜生・阿修羅などの悪趣地に堕ちて苦痛を受け続ける。逆にこの世で善行を積んだ人は、死後、天界や人間などの善趣地に輪廻転生して福楽を受ける。しかし、どの地にも永遠に留まることはできず、そこでの寿命が尽きれば再び輪廻転生を繰り返す。最高の悟りを得た阿羅漢聖者だけが死後どの世界にも

生まれ変わることがないと説く。との註を付している。（同書　一九四頁）

なお、中村元は、「仏教辞典」で

原語 saṃsāra は「流れる」ことから「さまざまな（生存の）状態をさまよう」ことを意味し、生ある者が生死を繰り返すことを指す。〈輪廻転生〉〈生死〉〈生死流転〉などとも訳され、現代インド諸語では「世界」を意味する。輪廻思想は古代ギリシアや古代エジプトにも知られるが、インドでは業思想と結びついて倫理観が深められ、輪廻の状態を脱することが解脱・涅槃であり、インドの諸宗教に共通する目的となっている。

インド思想

ヴェーダの来世観は楽観的で、死後には天上界で神々・祖霊と交わることを願い、悪業によって地獄におちることを恐れていたが、死後他界においても再び死が繰り返されることから、再死を克服し不死を獲得することが説かれるようになった。死者のたどる道は神々（天）・祖霊・地獄の三種に分かれ、この世に再生する五段階の過程をアグニ（火神）への五種の献供になぞられる五火説と神々と祖霊の二つ道と合わせて〈五火・二道説〉と呼ばれる体系的な輪廻思想が後期ブラーフマナから初期ウパニシャッドにいたって整備された。

紀元前六世紀以降、都市の勃興とともにバラモン（婆羅門）思想に対抗するさまざまな思想が興ったが、仏典ではジャイナ教を含むこれらの集団を六師外道として伝えている。それらの思想は多く苦行主義であり、業・輪廻に対する見解を示していると考えられる。ジャイナ教では世界は霊魂（jīva）と非霊魂（ajīva）からなり、行為によって霊魂に業が流入する。この業身が天・人・畜生・地獄の世界に輪廻する。付着している業の汚れを滅することで解脱し、そのための苦行を重んずる。

仏教思想

仏教でも輪廻思想を採用し、人・天・畜生・餓鬼・地獄の五つの輪廻の世界（五道・五趣）を説く。後に大乗仏教では阿修羅が加わり、六道（六趣）輪廻として流布し、わが国でも定着している。原始仏教では解脱者の死後の存在や身体と生命の関係に対する解答を無記（むき）として退け、解脱のためには無意義な問題とした。しかし、無我説において業を担う輪廻の主体を説明することは仏教教理の上で常に問題とされた。説一切有部では輪廻を十二支縁起（十二因縁）によって説明し（業感縁起）、死有と生有の間に〈中有〉の存在を認める。これは最大四十九日間の死者のさまよえる状態であり、中陰法要はこれにもとづく。チベットに伝わる『中有（バルドゥ）における聴聞による大解脱』（〔*Bar do thos grol chen mo*〕）は『チベットの死者の書』として西洋に紹介され、C. G.ユングによって評価された。